

白熱パネルから見えてきたもの

保坂俊司

「新たな比較思想の可能性を切り開く」という思いを込めて、末木文美士会長の下スタートした「白熱パネル」と題した東京例会も三回を経て、軌道に乗りつつあるが問題も徐々に明らかになってきた（二〇一五年二月現在）。

以下においては、ご参加いただけなかった会員の皆さんの為にも、過去二回（二〇一四年二月、二〇一五年三月）の報告を兼ねて、比較思想の新たな方法論構築のために試みられた本会の簡単な報告を行いたい（但し、第一回のパネルに関しては、四一号に掲載されている）。所謂グローバル化の時代に、求められている異文化・文明理解、特にその中心の一つである思想研究において、比較思想の役割は決して小さくないはずであるが、しかし現実には、学会としてまた社会的にも、往時のエネルギーを難じなくなっている。その原因の一つに比較思想の方法論の問題があるのではないか、という指摘である。つまり、現在の

比較思想の原型ともいえる東西思想の相違を前提とした比較という単純な発想が、現実にはぐわなくなつたのではないか、ということである。その後、西欧文明の世界的な浸透による東西の差異の希薄化が、比較思想への魅力の喪失やその役割への期待を減損している、という指摘である。言葉を換えれば、中国やインド、そしてイスラムの各文明の台頭という現実には、欧文明の優位を前提とする東西思想の比較という二項対立的な把握、あるいは両者の差異を比較するという発想そのものに限界があるのでないか、との第一回の白熱パネルにおける末木、廣澤両氏の指摘を受けての第二回の白熱パネルであった。

まず頼住光子氏により、「西洋以外にも「文明」を認めることをその前提とする比較思想という営為であった」あるいは、「歴史の平行現象を解明し、その類同の中に人類に共通する「精神」を発見する営みという比較思想史の前提を踏まえての鳥瞰

的な把握がなされ、その上で倫理的な視点から、比較思想を通じて、普遍的なるもの、根源的なるものを求める」ことの意義と、その有効性が指摘された。

一方で、森村氏は、道具としての言葉によって却って限定される、あるいは特徴づけられる思想を如何に、普遍的な視点から表現できるかという問いを、「問文化性」¹という概念を取り上げ、比較思想^{コンパレーティブ・シンキング}としての翻訳を検討する。その際に、文法という観点に着目し、西田幾多郎と西谷啓治の文体から問文化的翻訳の実践を考察する」として、言語構造の持つ思想表現とその翻訳の問題を、西田などの思想例に従来にない視点から検討された。

両先生の議論は、いわば思想研究のマクロとミクロの視点からのアプローチであり、予定時間を遥かに超える議論が繰り返られ、司会者である筆者ならずとも手に汗握るパネリスト、会場間の議論の応酬があった。いずれにしても過去二回のパネルの議論は、比較思想の持つ特徴と限界を見事に顕在化した。そして、その中で従来の二項対立的なアプローチを超える発想として、故井筒俊彦氏の主体的な思想研究の方法に着目する視点が提示された。井筒俊彦氏は本会の初期のメンバーであり、やがて本会から距離を置かれたが、今後は比較思想の現状打破の手段として井筒氏の研究方法に関して取り組む必要がある。

ところで、以上の議論に加え、筆者は現在の比較思想に加える必要があると感じている点がある。それは、日本の比較思想

の原点ともいえる中村元博士の比較思想の原点には、独善に墮して、日本社会を破滅寸前にまで導いた戦前の思想に対する深い反省から生じた開かれた思想の探求と、その社会的な展開、具体的には平和社会の構築に、思想研究から資するという、極めて現実的かつ実践的な思想というより、決意があったことを改めて検討する必要があるであろう（中村元『宗教における思索と実践』毎日新聞社、昭和二十三年。復刻版サンガ平成二二年）。尤も、中村博士自身の中には、学問領域での発言に終始されていたが、しかし中村比較思想研究の原点には、このような決意があったということは、比較思想の方法論の基礎理念として忘れるべきではないと筆者は考えている。というのも現今、兎角、哲学や思想研究者は実社会から遠ざかりがちであるが、自らの学問的な裏付けを基礎に、この激動する社会に、自らの学問の成果によって積極的に貢献して行くという覚悟が必要ではないであろうか。もちろん、それは政治的な発言をするということではないが、自らの学問の成果を積極的に世に問わねばならないという覚悟を持つということである。

いづれにしても、グローバル化の今こそ、比較思想の役割が有効であること、またそれをアピールすることは重要であろう。

(1) 橋裕「比較という方法」(岩波講座『哲学14哲学史の哲学』所収、岩波書店、二〇〇九年、七九―一〇一頁)参照。

(ほさか・しゅんじ、比較思想・文明、インド宗教思想、

中央大学総合政策学部教授)